

## はもまつり（篠山町）

「ガタ ガタ ガタ。ガタ ガタ ガタ。」

おとなたちが戸をたたく。

「スッテンテン、スッテンテン。」の声とともに下手〈しもて〉から着かざった男の子が、また上手〈かみて〉から、頭にかんむり、はおりはかまの武士しようぞくのおとながあらわれ、まな板の上へのせられた大きなはもをめがけて、

「エイ、エイ。」のかけ声とともに、手にもった刀をふり下ろす。

見物人は手をたたく。祝い酒がふるまわれ、ただちに氏神〈うじがみ〉さん、八幡〈はちまん〉神社の神前で、「アンギャギアホー、アンギャギアホー。」と、ふしぎなことばで、はもまつりがとどこおりなく、おわたったことを神さまに告げます。



むかし、むかしそのむかし、この沢田あたりは名のとおり、一面の沢地〈たくち〉で、じめじめした土地でした。そのうえ、沼には一匹の大蛇が住み、ときどき、人間を供物〈くもつ〉にするよう村人をおどしました。それも、この村に生まれた長男でなければいけないという、よく深い大蛇のいいつけに、村人たちは仕方なく、「こんどは、彦右衛門〈ひこえもん〉さんのあととりじゃそうな。かわいそうに。」

その日は、晴着をきせたあととりを沼の岸までつれていき、村人たちは、泣き、泣き、引上げていきます。

こんなことが、何百年もつづきました。

ある年のこと、通りかかった一人の武士がこの話をきき、たいへん、かわいそうに思い、「われ、神力により、この大蛇を退治しよう。」と、みごとに、その大蛇を切り殺しました。

急に、平和になった村の人々は、この武士の恩を子孫にいつまでも、伝えなければならないと、よろこび合いました。

大蛇になぞらえた「はも」を切る行事が、今も毎年氏神まつりの日（十月十六日）に行なわれています。

